

「戸口が閉められる前に」（ルカによる福音書一三章二二〜三〇節）

1 メシアとしての旅

都エルサレムへ向かうイエス。今日の聖書箇所も、その旅の途中での教えを伝えています。

少し振り返って見ると、イエスが福音の宣教を開始したのは、ご承知のように、郷里ガリラヤにおいてでした。そのときイエスはおよそ三十歳であったと聖書に書いてあります（三・二三）。一年あまりガリラヤで活動し（ヨハネ福音書では三年）、その後、エルサレムに上り、そこで祭司長らにとらえられ、ローマ総督ピラトによって十字架刑に処せられたのです。

ガリラヤを去ってエルサレムに上るといのは、イエスの生涯でもっとも大きな転機をなしたものでした。そしてそれは、イエスご自身のメシアとしての自覚の深まりによったことでした。

すでに読んだところですが、ペトロが、イエスを、あなたはメシアですと告白するところがあります（九・二〇）。そのときイエスは、ペトロの告白を受け入れながら、メシア、つまり、イエス自身が、必ず苦しみを受けること、エルサレムで長老や祭司長らに排斥され殺されること、三日目に復活することなど、伝えていきます（九・二一以下）。こうした苦難のメシアとしての自覚が、エルサレムに上る決意と行動となったのです（九・五一）。

そのエルサレムに着くまで（一九・二八）、どのくらいの日数を費やしたのか、分かりませんが、その経路も二、三を除いて分かりません。二、三というのは、サマリアとガリラヤの間を通って行った（一七・一一）とか、最後、エリコの町を通っている（一九・一）とかです。

イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた（二二節）。

エルサレムへのイエスの旅は、申し上げたようにメシアとしての旅でした。それはこの今日の箇所の最初の一節にも、はっきり示されています。

何より、「エルサレムへ向かって進んでおられた」という言葉には、主がご自身の歩みをしっかりと見つけていることが示されています。また「教えながら」という言葉にも、それが現れています。

こうしたイエスとその一行の旅は、人びとにも、大きなインパクト（衝撃）を与えたらしく、人びとは神の国はすぐにでも現れると思った、と書いているところがあります（一九・一一）。

先ほど申し上げたように、ガリラヤを去ってエルサレムへと向かう、長い期間でなかったとはいえ、どのくらいの日数であったかは分かりません。またどこに立ち寄ったかも、詳しいことは分かりません。しかしこの旅の報告が、この福音書では、じつ

は一番長い部分を占めています。ルカ九・五一にはじまり一九・二七まで、ほぼ十章にわたっています。

このルカによる福音書、はじまりを飾る御子の誕生物語、そして終わり、受難の歴史、すでに私ども読んできたわけですが、その記述は、これ以上ない美しさと深さを持つていました。しかしそれに少しも劣らない豊かな筆致で、ルカは、エルサレムに上るイエスを、その教えを伝えていきます。福音書は、ここに至って、その佳境にさしかかったと言ってよいのです。

2 力を尽くして狭き門より入れ

さて今日の箇所で、イエスは、周りからの一つの質問に答えて、そこにいた「一同」に語りはじめます。

すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」(二三〜二四節)。

周りから声があつてそれにイエスが、何らかの形で答えるということは、これまでも何度かありました(一二・一三他)。ここも同じです。

「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」というのが質問です。内容は救われる人のいわば「範囲」を問うものです。例えば、われわれイスラエルの民は救われるけれども、異邦人は救われないとか、律法に忠実な者は救われるけれども、世にいう「罪人」は救われない、あるいはもつと言えば、洗礼を受けた人は救われるけれど、受けていない人は救われないなど、その範囲を問う、それをはっきりさせてくださいという質問です。突然出て来たような質問ですが、こうした問いはユダヤ教の中にずっとあつたものでした。

例えば、善いサマリア人のたとえ(一〇・二五以下)を思い出していただければよいと思います。道で倒れていた人を助けたのは、サマリア人でした。しかし善いことをしたのはサマリア人だとは、ユダヤ人の律法学者は、答えられなかったのです。常日頃、サマリア人を差別し、異邦人と同じと見なし救いから遠いと考えていたからです。同じことは、罪人、徴税人と一緒に食事をしていたイエスを、律法学者やファリサイ派の人がとがめたところにもあります(五・二七以下)。今日の質問はいままでと少し違うように見えますが、そうではなかったのです。質問の内容は、私どもがこれまで律法学者やファリサイ派の人たちの口から聞いてきたようなものであつたこととは明らかです。

ただそれがここで抽象的な、一般的な体裁でなされているということ、それがいままでと違うところです。質問者はちよつと哲学っぽい装いのもとに、命題化して、古くからある問いをイエスに提出したのです。

「狭い戸口から入るように努めなさい」。それが、イエスの答えです。質問とはかみ合っていない。イエスは質問を、まっとうな問いとして、そのまま受けとめるこ

とをしていないからです。よく考えれば、この問い、果たして人間はそれに答えることができるのでしょうか。救いは神のなさることです。この質問も、神にしか答えることのできないものなのです。人間がもてあそぶことは許されない問題です。イエスはそのような問いを拒否します。

救われる人が、多いか少ないか、それは、あなたの問題ではない、あなたがたの問題ではない。あなたが自分の救いの道をいま本当に歩むこと、それに努めること、それこそ、あなたの問題、あなたがたの問題なのだ、というのです。

「狭い戸口から入るように」というと、私どもは、マタイによる福音書、山上の説教の、「狭い門から入りなさい」という有名な言葉を思い起こします。なるほどマタイのほうは「門」(ゲート)ですし、ルカのほうは「戸口」(ドア)、その違いはあっても、救いへと通じている、神の国へと通じている、間違いのない入り口から入るようにという点では同じです。

「狭い」というのは、人が一人通るのがやっとという、物理的な狭さのことでは、もちろんありません。あるいは、定員が決まっていて、人が殺到し、狭き門になる、という意味でもありません。というのも、神の国の定員は、決まっているわけではないからです。

アンドレ・ジッドの『狭い門』という有名な小説、昔読んだことがあるという方も多いと思います。古い文庫本が私の本棚にもあって、ジッドの他の作品と一緒に読んだきおくがあります。愛と信仰のはざままで苦悩し、死んでいく一人の女性の話だったような記憶があります。ジッドは、マタイではなくて、ルカの「狭い戸口から入るように努めなさい」(力を尽くして狭き門より入れ、文語訳)を、最初にかかげ物語を書いていきます。「狭い戸口」とは、信じ、従い行くことの厳しさを表す比喻です。だれにとつても厳しい。しかし、その道を、多くの問題と「格闘」しながらも——「務めなさい」の元の意味は、格闘せよ——歩んでいくようにと、イエスは教え諭しておられるのです。

3 希望としての神の国

さて二四節のイエスの言葉には、狭い戸口から入るよう努力せよ、という勧めのほかに、もう一つ、「入ろうとしても入れない人が多い」というのがありました。それを別の比喻、たとえを用い、イエスは説明しています。

家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまっただけからでは、あなたがたが外に立つて戸をたたき、「御主人様、開けてください」と言っても、「お前達がどこの者か知らない」という答えが返ってくるだけである。そのとき、あなたがたは、「一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」と言い出すだろう。しかし主人は「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」と言うだろう(二五〜二七節)。

「入ろうとしても入れない人」とは、どのような人たちのことをいっているのです

ようか。

ある家のことが語られています。結論から言えば、神の国です。そしてその主人はもちろん神です。問題は、この主人が「立ち上がって、戸を閉めてしまった」ということです。戸が閉められた、天国の扉が閉められてしまった。色んなことがこのたとえには言えるでしょうけれど、ともかく、閉められてしまった、絶対に開くことはない、それがポイントです。

ここから私どもが知るべきことは、何でしょうか。簡単に言えば、この主人が起き上がって戸を閉めに行くまで、じつはたっぷり時間があつたということではないでしょうか。その時間を、遅れた彼らも生きていた。この時間こそ、私どもの人生だという事です。

閉められてからは遅いのです。コネはききません。しかし、いまはまだ、大きく開かれています。閉められてからのことがここには書いてあるけれども、いまはまだ開かれています。閉められてからに注意を払うべきです。遅れてきた者たち、外にたたずむほかなかった者たちの言い草からすると、まさか、もう閉まってしまふとは、まだ開いているものと彼らは、高をくくっていたようです。この世の終わりがまだこなくても、個人的な終わりは、それより先にきます。

入れなかつた彼らは、「不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」と言われています。その通り、彼らはきつと、不義を働く、不敬虔な者たちであつたのでしよう(詩編六・九)。

彼らは、不敬虔なままにこの時まで来てしまいました。しかし悔い改めて神の戒めに生きることができたのです。可能性はあつたのです。私どもの注目すべき点はそこです。だれにも神の国は開かれていた。最初の質問者が言つたのとは違って、救われる者は少ないのではないのです。

さて閉じられた戸口の向こうでのことが、終わりに書いてあります。神の国の大宴会です。旧約の預言者たちらしい、神の国、天の国は、神の食卓の交わりとして描かれてきました(イザヤ二五・六〜八他、ルカ一二・三七、一四・一五他)。

あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ざりする。そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く(二八〜二九節)。

そこに垣間見える神の国には、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちがいるだけではない、まさに世界の諸国民が、異邦人が、そこに来て、ともに食卓に着いています。それは私どもの希望です。その希望をもって、私ども、いま、狭い戸口から入るように努めたいのです。狭い戸口とは、悔い改めの道です(五・三二)。狭い戸口とは、神の言葉を聞いて、行ふ人の道です(八・二二)。あるいは、イエスが種まきのたとえで、「良い土地」と呼んだような、立派な善い心で御言葉に聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちの道です(八・一五)。私どもの人生は戸口の閉じられる前にあるのです。

(二月二〇日)